

# 左京三条二坊(長屋王邸)の調査 - 第329次

## 1 はじめに

調査地は、奈良市二条大路南1丁目122番地に所在し、平城京左京三条二坊二坪の南部に相当する。これまでの周辺の調査から、長屋王邸の中央内構南部と想定される場所である（図153）。

現地はこれまで駐車場として利用されてきたが、店舗付事務所を建設する計画があり、発掘調査を行った。調査区は建物建設予定地の北半部分に、東西14m、南北15mで設定した。調査面積は210m<sup>2</sup>。調査期間は2001年6月26日から7月12日である。

なお、付近では過去に4回の発掘調査が行われている。特に本調査区の東側に位置する第178次調査と第269-4次調査では、長屋王邸中央内構の中でも大規模な東西棟掘立柱建物SB4235（B期：720年頃～729年）を検出している（『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告』奈文研 1995。『年報1997-III』）。本調査区がSB4235の西延長上にあたることが想定されたため、その規模を確定することを第一の目的として調査を行った。

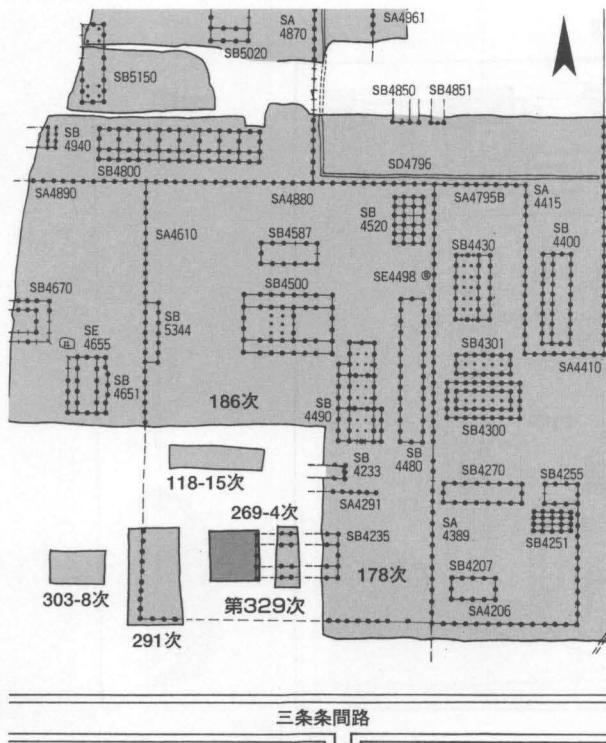


図153 第329次調査区位置図

## 2 基本層序

本調査区の基本層序は、現地表から、アスファルト舗装、駐車場造成のための客土、耕作土である黒褐色土、床土である茶褐色砂質土、遺物包含層である褐色土、地山である黄灰色砂質土となる。褐色土は調査区の北東部にのみ薄く堆積している。現地表面の標高は61.3m前後、遺構検出面である黄灰色砂質土の上面は標高60.2m前後であった。

## 3 検出遺構

黒褐色土までを重機によって除去し、床土である茶褐色土を掘削した後、褐色土および黄灰色砂質土上面において、掘立柱建物、柵列、流路、土坑、柱穴などを検出した。以下に主な遺構について詳述する。

**SB4235** 第178次調査および第269-4次調査で、東半部を検出した南北両庇付き東西棟掘立柱建物。西妻柱列を確認し、建物の桁行は7間であることが確定した。柱列は調査区の東端に位置したため、いずれも柱穴全体を検出することはできなかったが、掘形は1.5m前後の方形と考えられる（図156）。



図154 調査区全景（北から）

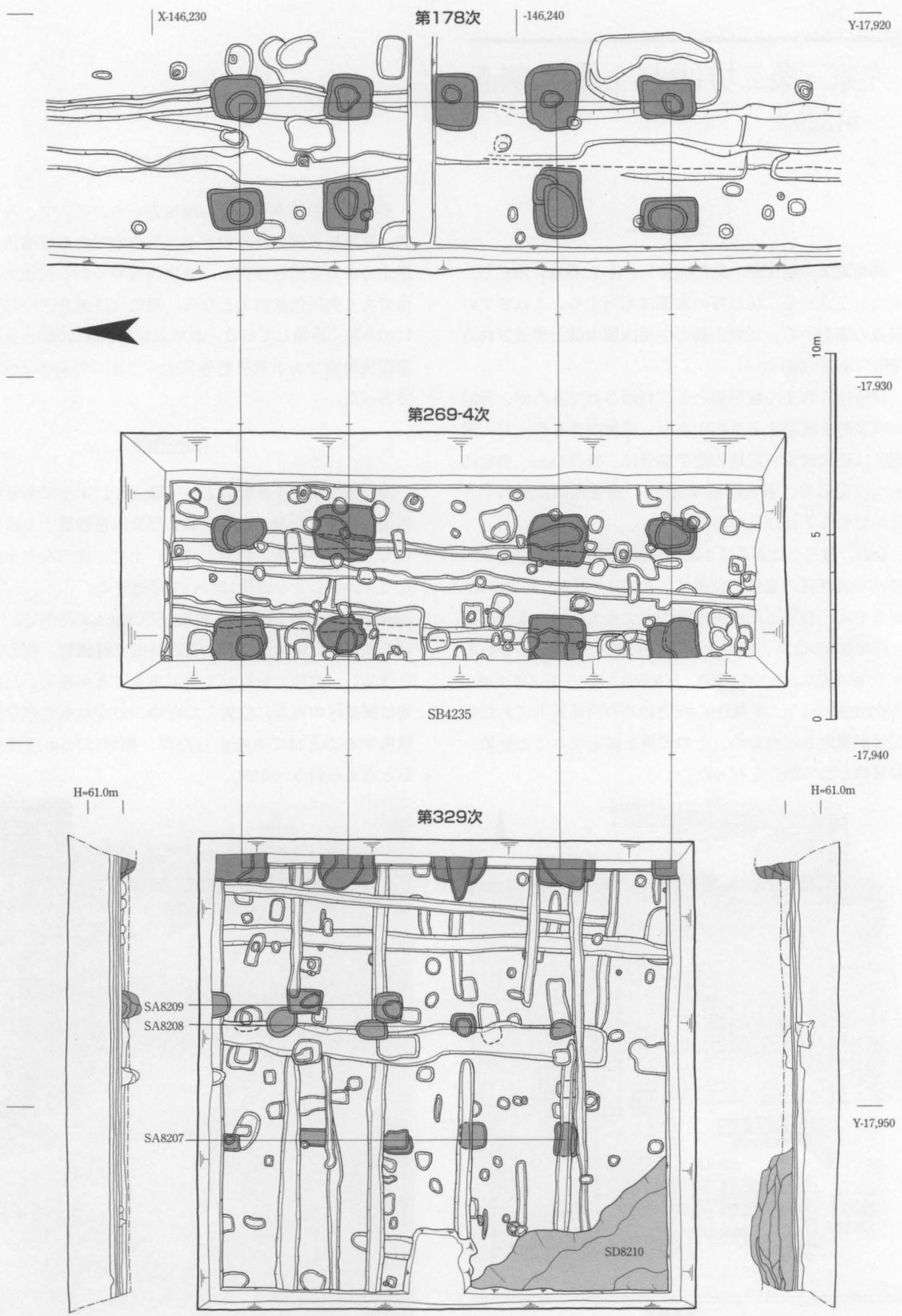


図155 第329次調査遺構平面図 北・南壁断面図 1:150

SB4235は桁行7間、梁行2間で、身舎の南北に庇が付く。柱間の寸法は、桁行10尺、身舎の梁行10尺、南庇の梁行10尺である。北庇の梁行は、第269-4次調査の結果、9尺である可能性が指摘されているが、今回の調査では柱穴全体を検出していなかったため、検証することができなかった。

**SA8207** 調査区中央よりやや西側で検出した南北方向の掘立柱塀。4間分を検出し、北へ続く。柱間は8尺等間。

**SA8208** 調査区中央よりやや東側で検出した南北方向の掘立柱塀。3間分を検出し、北へ続く。柱間は9尺等間。

**SA8209** 南北方向の掘立柱塀。2間分を検出し、さらに北へ続く。柱間は8尺。柱穴の重複関係から、SA8208よりも新しいことがわかる。

**SD8210** 調査区の南西隅で検出した流路。出土遺物はなく、時期は確定できない。

#### 4 出土遺物

出土遺物には、瓦磚類、土器類がある。瓦は、600点あまり出土した。軒丸瓦2点、面戸瓦1点を含む。わずかに中世の瓦を含むが、大半は奈良時代のものである。詳細は表23に示す。



図156 SB4235西妻柱列検出状況（南から）

表23 第329次調査出土瓦磚類集計表

軒丸瓦		道具瓦	
型式	点数	面戸瓦	1
中世	1		
形式不明	1		
軒丸瓦計	2		
丸瓦		平瓦	磚
重量	8.0kg	33.5kg	0.6kg
点数	128	544	4

土器は、コンテナ3箱分が出土した。奈良時代から近世までの須恵器、土師器と近世の陶磁器である。木製品、金属製品、木簡は出土していない。

#### 5 まとめ

調査の最大の成果は、掘立柱建物SB4235の規模を確定できることである。桁行7間、梁行2間で南北に庇をもつ建物は、本調査区の北方に位置する長屋王邸正殿SB4500に次ぐ規模である（図157）。

第269-4次調査では、SB4235はSB4500と東西の中軸線を共有し、桁行9間の可能性が高いと予測されていたが、実際には桁行7間であった。そのような非対称性もまた、長屋王邸内構の空間利用に関する新たな知見といえよう。

（豊島直博）

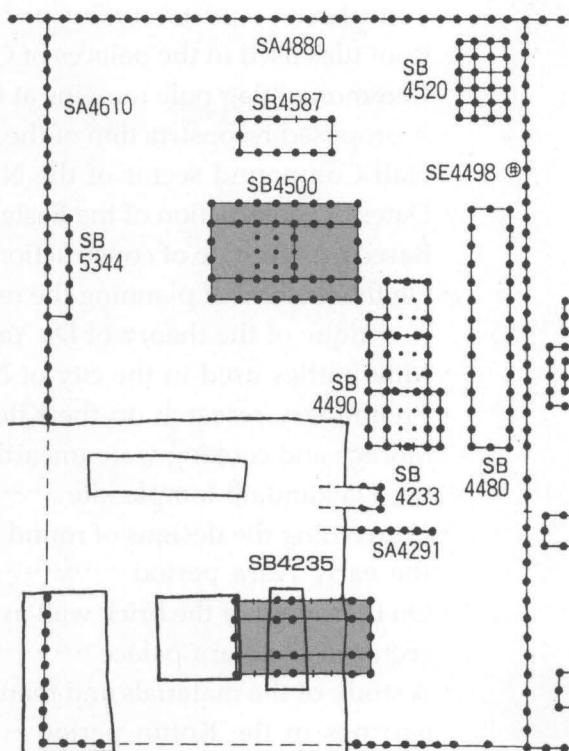


図157 長屋王邸中央内郭日期建物配置図 1:2000